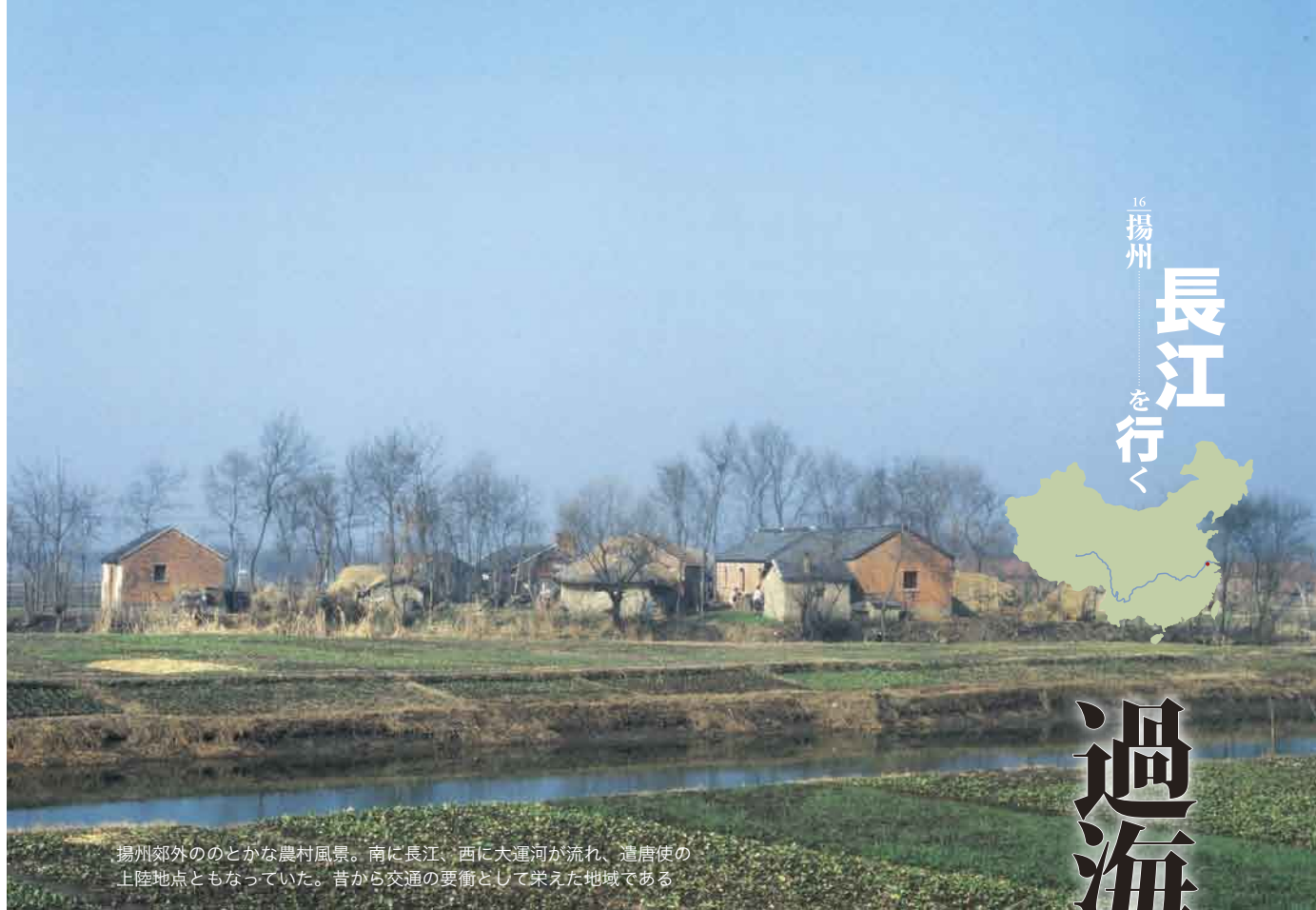


過海大師のふるさと



揚州郊外ののどかな農村風景。南に長江、西に大運河が流れ、遣唐使の上陸地点ともなっていた。昔から交通の要衝として栄えた地域である

日中仏教史にその名を残す過海大師こと、鑑真和上。その故郷の寺を訪れてみれば、現世利益を求めて人々が集まり、空前の「商売繁盛」だ。江戸の俳人・芭蕉は唐招提寺の鑑真和上像に涙を見て、若葉して御眼の雫をぬぐほばや——と詠んだそうな。故郷に戻った鑑真和上もいつもと同じ憂い顔だった。

長江の旅はのんびりやろう、と心に決めていたものだから、ガイドブックの類は持ち歩かない。目的地は長江沿いで適当に決める。手元には地図が1枚あればいい。

今回、揚州を選んだのもたまたま南京から揚州行きのバスが目についたからである。だから予備知識もほとんどないままバスに乗った。

着いてみると、ここはあの鑑真和上の故郷だという。鑑真は唐の時代、正しい仏法を教えるため、国禁を犯して日本への渡航を試みた人物である。難破、漂流という挫折の連続。5度も失



市場で売られる長江で獲れた魚。中国の内陸部では川魚をよく食べる

敗して多くの弟子を失った拳句、自身も失明するという艱難辛苦のすえ、12年目の753年、6度目の航海にしてようやく鹿兒島に上陸を果たした。真正銘、命がけの航海だった。

後に鑑真は奈良に唐招提寺を開き、日中仏教史に名僧として名を残している。年配の読者の中には日本の留学僧を描いた歴史小説「天平の薨」（井上靖著）で彼の名を知った人も多にちがいない。

私の場合、鑑真と聞いてまず心に浮かんだのは、愛媛県の済美高校である。この高校の野球部のキャプテンのあだ

名が「ガンジン」だった。顔つきが鑑真に似ていたそうだが、誰がそんな昔の人物をあてたのか、ちょっと気を引かれた記憶がある。

ちなみに済美高校野球部は、創部3年目であれよあれよという間に力を付け、昨年春の甲子園選抜大会に初出場し、全国優勝を成し遂げてしまった。鑑真和上のご利益があったのかも知れぬ、と思つたものだ。

それはそうとして、もう一人、揚州には鑑真よりも有名な人物がいる。江沢民前国家主席である。彼の生家は揚州市内のほぼ真ん中にあり、いまでは

観光スポットとなっている。

江氏は日本人に会うと、よく同郷の鑑真を引き合いに出していたという。「鑑真は仏教、医薬学、建築、彫刻などを日本に伝え、当時の中日文化交流を促した、傑出した人物だ」と語っている。7年前、江氏が来日した際に引かれた早稲田大学の講演でも、鑑真を引用して中日の長い交流の歴史に言及していた。

それにしても、鑑真記念堂のある大明寺は相当裕福らしい。5月初旬の連休中だけでも、7万3000人もの観光客がこの寺を訪れている。入場料

野中章弘
1953年兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」「粋と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表。



(右) 大明寺にある鑑真の坐像。1980年、唐招提寺から里帰りした国宝の鑑真和上像を写して作ったものという。(下) 鑑真の渡航の様子を描いた絵。まさに決死の渡航だった



はひとり35元（1元＝約13円）だから、日本円にして総額三千数百万円の収入があったことになる。寺の中では豆腐を使った精進料理店なども出しており、なかなか商売上手である。

大明寺の人気の背景には、昨今の仏教ブームも影響しているかもしれない。現在、中国の仏教徒は1億人、僧侶は約20万人で、「仏教の黄金時代」を迎えつつあるという。

ただ信者といっても現世利益を求める風潮が目立ち、人間救済の教えは必ずしも浸透しているわけではないらしい。厳しい戒律を守った鑑真がいま生きていたら、この拝金主義的な世相をどう感じるのかな、とふと思う。

このコラムを書きながら、もうひとつの「鑑真」を思い出した。ちょうど20年前、中国から帰るとき、上海で就航したばかりのフェリーに乗った。その名も「鑑真号」。大阪まで片道2万3000円で所要48時間という船旅だった。

このときは船酔いですつと吐き続け、胃袋がよじれるほどの苦痛を味わった。命を賭して海を渡った鑑真や遣唐使たちの気持ちも、ほんのちよつぱりはわかるような気になったものである。